

宗教研究會編

靈光の曙光  
眞教の活現  
活動教  
全

225  
605



# 活動教 目次

活動教の發表に就て

緒言

第一、宇宙の真相……………曰く、萬有の本質も、宇宙の眞際も全く活動なり。

第二、人生の意義……………曰く、人生の眞意趣は、自覺的活動に在り。

第三、道德と宗教……………曰く、道德も宗教も、其極致は、皆自覺的活動に在り。

第四、社會と個人……………曰く、社會の精神は、我が精神なり。

第五、死の解釋……………曰く、物は子孫に傳へ、活力は社會化し、殘る所は、靜に絶對の儘に眠る。

第六、結 論……………曰く、吾人が人生の實驗に得たる所は、自覺的活動主義なり、絶對的努力

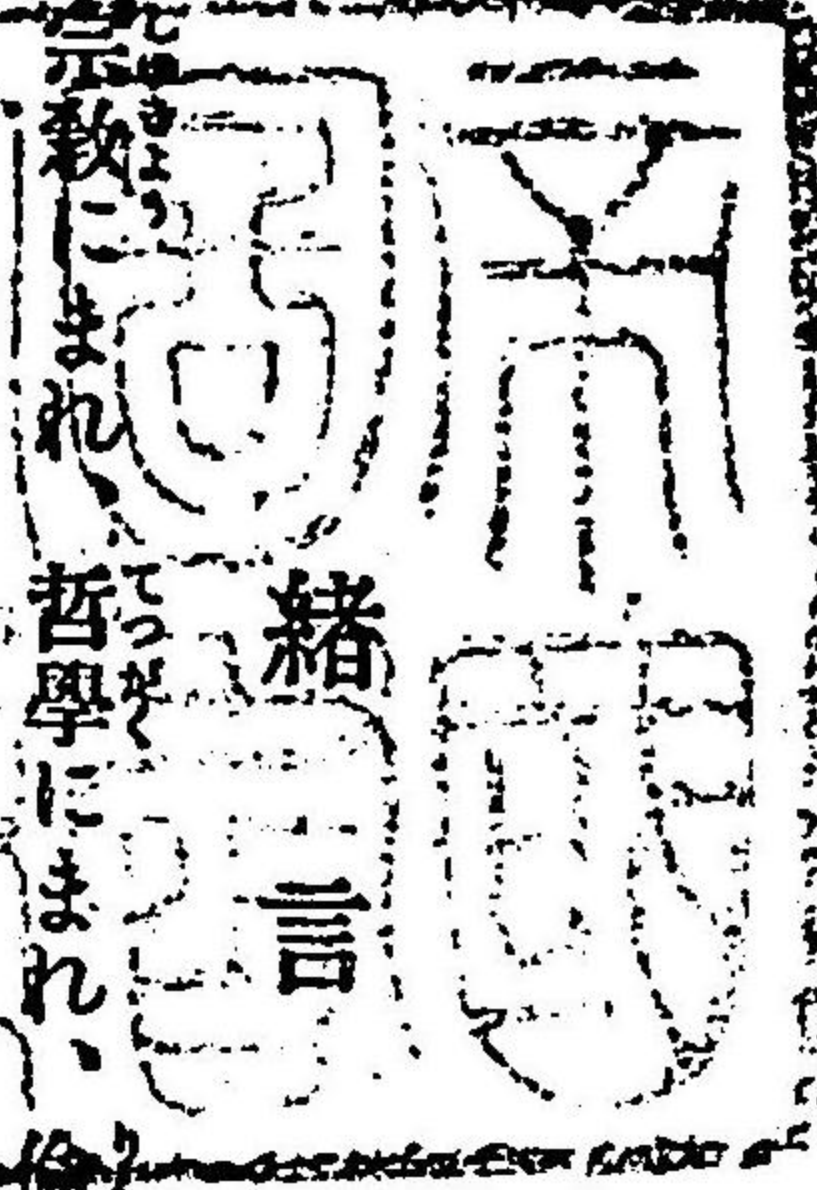
教なり。

特46  
852

## 靈界の曙光 眞教の活現 活動教

植 田 央

明治 24  
7 2 24  
内交



宗教にまれ、哲學にまれ、倫理にまれ、乃至一切の學問は、結局人生の眞意義を尋ねんとするものに外ならぬ。人生を離れては、疑問はない、従つて又學問もないのである。人生問題は活ける問題である、一切の問題の結着點である、古來世界幾多の賢哲、偉人が、之が爲めに力を盡したけれど、今日に至つて、猶決定せぬ問題である、勿論古に在つて、不明であつた事柄も、今は多少解釋されたものもあるが、しかし一つの解答を得ると、俱に、更に新なる、多くの、大なる疑問は提供せられつゝあるのである、然らば人生の眞意義は、遂に不可解であるのであろうか、否々、不可解であるとするのも、畢竟は一種の解答である、それで吾人は、よし間違つたとて、止むを得ぬ、兎に角何とか、人生に一つの解釋を加へねばならぬ、所謂人生觀と云ふものを立



てねばならぬ、勿論千古未決の大問題であるから、淺墓な事で、解決の効を奏し得べきものでないのは當然である、幾多の懷疑、煩悶と、眞摯なる健闘とに由つて、始めて自覺するに至るものである、既に自覺した時は、其人に於ける人生觀は確立したのである、一切行動の指導者、中心點が定まつたのである、禽獸の群を脱して、始めて人間たるの資格を得たのである、所謂主義ある人となつたのである、何人でも統一ある生命、主義ある生活を求めようとするには、是非共人生の難問に到達して、何とか之に解答を附せねばならぬのである。

然り而して、古來多くの賢哲が、此の人生を解釋せんとするに、先づ宇宙の何たる、自然の歸趣如何を尋ねて以て、夫より演繹して人生の意義を定めんとするものと、人生の實驗より歸納的に人生及び自然の歸趣を解せんとするものとの二種がある、前者は多く唯物論的、無神論的、自然論、快樂主義に墮するを常とし、後者は多く唯心論的、有神論的、終局目的論、嚴肅主義に到るような傾きがある、勿論これは一概に論すべきではないが、要するに吾人は、自己の實驗的自覺に基づき、更に之を理性の批判に訴へ、以て人生の意義を定め、自然の歸趣を明かにせんとするものである、若し

自覺に基づかぬものであつたならば、如何に高尚なる見解であつても、實際生活に、直接の効果を及ぼすことが甚だ薄いのである、畢竟空論に終る恐れがあるのである。吾人は固より公衆の前に提供するだけの、自覺も、見解も有せぬ一青年であるが、毎に兄氏の説訓を耳にして、自己相應の解案をば有せぬではない、そこで未熟ではあるが、現時思想界糾紛の過渡時代に際し、世の人生問題と苦闘しつゝある諸彦に、更に一の迷惑を増さしむべく、襲撃すること、斯の如しである。

### 第一、宇宙の真相

宇宙の解釋と、人生の解釋とは、二にして其實一つである、人生の解釋が定まれば、従つて宇宙の真相、自然の歸趣をも明らかめ得るのである、推究し能ふのである、又宇宙の解釋が立てば、之に伴ふて人生の意義は、自ら決すべきものであるが、今は便宜の爲め、二つに分けて、先づ宇宙の説明より始むることにしたのである。悠々たるかな古今、茫々たるかな天地、五十年の生命、五尺の身を以て、之を圖らんとするは、實に愚であらう、宇宙の真相は一言にして盡す、曰く不可解……眞に簡潔



明快なる斷案と云ふべきである、併し、借問す、不可解であるから、死なねばならぬと云ふ解釋は、何處より得來たのであろうか、勿論醉生夢死の殺潰よりは死んだ方がましであらう、只吾人は死ぬと云ふ前に、如何にして生くべきかを研究するの必要がある、否、如何に生くべきか、總ての問題の根本問題である、此の問題を解決したる上にあらねば、人は勝手に死すべき權利を有たぬのである、殊に宇宙の真相は不可能であつても、吾人は猶生くべき理由を發見するに苦しまぬのである……吾人は寧ろ多くは不可解のものに支配せられつゝ、生き、活動して居るのである、故に吾人は分らぬながらも、此の生と活動とある以上は、この生と活動とを立脚地とし、又出發點として、一切の問題、宇宙の真相をも推究せねばならぬのである。

吾人は斯の如き方面、即ち生存し、活動せる、自己を立脚點とし、自我の實驗、自覺に基づいて、宇宙の如何を解決せんとするものである、夫で吾人はデガルトの「我思故我存」との自觀的實在論に一步を進め、自觀、他觀以上に、此等の思惟觀念、及びその思惟觀念の對象たる物、そのものの實質は、何であるかを實驗せねばならぬ、何でなければならぬ、なんであるべきものだと云ふ理論と、何であると斷定する實驗とは、其間に多少の徑庭がある、夫で吾人は何であるべきと云ふ、物質論も唯心論も、俱に、取らぬのである、吾人の實驗する所では、活動と存在と云ふことは、全く同意味のものであると信するのである、活動がなければ存在せぬか、否やは、吾人は實驗することは出來ぬのであるが、活動は存在である、又その反面より、吾人の存在と信するものには必ず活動があると云ふことは、何人も實驗し能ふ所である、従つて心的現象も、物的現象も、畢竟は一つである活動の形式に、外ならぬと云ふても、差支はないのである、克く自然界の真相を觀察して見るがよい、大は天体の運行より、小は元子の旋動に至るまで、一つとして静止の状態に在るものはない、悉く活動して居るのである、否、活動があるから、萬有の存在と云ふことが疑はれぬのである。

今假りに一步を譲りて、宇宙の實在、本体は、物質であるとか、精神であるとか、眞如であるとか、若しくは不可知的であるとかしても、其性質は静止的でなくて、全然活動的でさると云ふことは異議はあるまい、吾人は勢力不滅の理法よりしても、有が全無に歸すると云ふことは、考ゆることは出來ぬと、同時に、離合あり、變化あり、進退があつて、同一物が永久に同一形式を保持するものでないことは明らかではある



が、無から有を生ずると云ふことは、到底思ひ到ることは出来ぬ、従つて又現に日常の實驗する如く、活動せる萬有が、全く静止に歸するとも思はれぬと、均しく、徹頭徹尾靜的のものであつたならば、どうしても動相を現はすことは出来まいと思ふ、夫であるから吾人は、活動轉變しつゝある、萬有、所謂現象の外に、宇宙の實在とか、萬有の本體と云ふようなものが、別存して居らうとは考へ得ぬのである、靜寂不動のあるものが、或る場所に嚴存して、それから變化活動ある萬有が、發生したとは信じ能はぬのである、實在の活動する形式が萬有であつて、萬有の中に存する活力をば、假りに實在とでも稱すべきである、要するに現象の他かに、實在を認めぬのである、變化ある萬有以上に、靜止的本體をば考へぬのである、現象と云ふは形骸である、實在と云ふは意匠である、活力である、之を二つと見るのは、吾人が便宜上の假設であつて、決して別物ではないのである、それでこの有の儘が、宇宙の真相である、此の世界が眞實の世界である、萬有は決して迷妄の相ではない、一寸見れば、總てのものは轉變無常であつて、誠に頼みなき、つまらぬようにあるけれど、此の轉變無常が、無始より今日に至り、猶無終に連續するものであると云ふ點から、大觀すれば、全く

本有常住である、又更に轉變無常は、形態位置の變換であつて、物それ自體の消滅でもなく、活力の亡失でもないと云ふことに、思ひ到るならばどうであらうか、殊に又世界人生になんにも變化がなかつたならばどうであらうか、人間も金石以下のものとなり了りはせまいか、否、吾人は到底無變化の世界、人生の存在を考へることは出来ぬのである。

離合、集散、生死、盛衰は、實在が人生と云ふ形式に活動する所の道程の屈折である、榮枯・生滅、成壞、増減は、矢張り萬有の上に於けるそれである、夫で宇宙の大局から見れば、唯一活動である、宇宙は長しへに活動するものである、夫れで吾人は今や、諄々しき論理や、例證を省いて、斷言するのである、曰く宇宙の正体は活動である、活ける力である、萬有の實質は活動である、活動は萬有を一貫せる唯一存在である、吾人の宇宙觀は活動的一元論である、活動と云ふことは、總てに對する吾人の實驗である、自覺である。

活動的一元論は、彼の哲學者の所謂唯物論も、唯心論も、又宗教家の所謂有神論も、無神論も、共に之を眼中に置かぬのである、否、此等の孰れとも異ならぬのである、



何となれば、所謂唯物論でも、元子を一つの活力と見れば、矢張り同じ事に歸着するのである、又唯心論でも、萬有に共通して居る、ある力を精神とすることになれば、全然同一であるのである、夫から彼の無神論と云ふのは、有神論に對し萬有以上に人格的の存在を認めぬと云ふまでいあつて、其内容は、唯物論か、唯心論かの、孰れにか外ならぬものである、又有神論の、所謂萬有以上に、人格的の存在すと云ふとや、實在を人格的に見ることは、容易に吾人の考へ能はぬことであるが、併し萬有には各自に目的をもつて居ると云ふ意味に於ける、萬有神論、宇宙には終局目的論的統一の活動があると云ふ意味に於ける、一神論は、固より吾人の首肯する所である。宇宙萬有に目的があると云ふことは、一寸考へにくいことである、勿論之は人生の方面から見たことである、人生を離れては目的論は成立たぬ、總ては悉く盲目的活動に過ぎぬかも知れぬ、併し人生も宇宙の内在するものであつて、人間も萬有の一つであることを忘れてはならぬ、夫で人生の歴史に顧み、人間の實驗に訴へ、又一方には宇宙萬有に自然の秩序あり、法則ある點から考へて見れば、目的論は穴勝不合理とは謂へぬのである、免に角、宇宙にも、人生にも、目的があつて、之を實現し、之に近か

んとする傾向を有して居るものであると云ふことは、自覺するに難くないのである。宇宙觀に對する、吾人の實驗は、活動的一元論である、その自覺は目的論的である、物心の二元を推究すれば、結局不二である、一如的活動的實在である、又現象と實在とは、全く融即しつゝあるものであつて別存すべきものでない、之を分別するは便宜上のことであつて、現象即實在と云ふも、猶隔靴搔痒の感なきにあらぬのである、吾人は世間相その儘を以て、眞實存在と爲すものである、併しながら又、吾人は敢て自然論、器械論を以て得たりとするものではない、吾人は決して意匠的、目的論的考察を放棄し得べきものではない、宇宙觀と人生觀とが全然分割し得べきものであるならば、イザ知らず、若し宇宙と人生とは相離るべからざる干係あるもの、宇宙觀と人生觀とは調和せなければならぬものであるとするなれば、意匠論、目的論は、立派に成立するのである、吾人の自覺は、此に到達して始めて、眞であり、力あり、主義となるものである、仁齋の天地を以て活物となすと云ふのも、單に盲目的活動を云ふたのではなく、全く這般の消息を説破したのであらう、聖人は天地を以て、活物と爲し、異端は天地を以て死物と爲す、一毫千里の差を生ず。とは、甘い哉言やと謂



ざるを得ないのである、本來は超人格的であるべき所謂實在も、こう云ふ意味からして人格的に、自覺的に考ゆるのは、別に答むるに足らぬことである。

### 其二、人生の意義

人間とは一體何であるかと云ふことは、至つて易き様で六ヶ敷、六ヶ敷様で亦易き問題である、今暫く科學的に此の問題を答へて見れば、人類は自然界の一生物である、大陽系に屬する一遊星である地球の上に存在する有機界、生物中の動物である、動物界中の脊椎動物、脊椎動物中の哺乳類、哺乳類中の有胎盤類、有胎盤類中の最も高等なるものである、そうして又吾人々類乃至一切生物の根源を尋ねて見れば、其原始には單細胞なる少なる一の生活力を有するものがあつて、此の單細胞がその固有の活力と養分とに由つて、生育分裂し、其結果複細胞体を組織するようになったのである、而して又其の自己の獨力にて分裂増加するに不適當であるものは、二箇の同種の結合に由りて生殖作用を行ひ、以て種の繁殖を圖り、新生活を開始するように至つたので、繁殖の結果は、生存の競争を起し、種々の淘汰を経ると同時に、一方に發

達を來し、優勝劣敗の勢に由つて、多くの種類を生じ、人類は是等の種類の最上位に在り、發達の頂點に達したものである、而して又現在の吾人は、此人類なる種屬の益々進歩したるものである、原始單細胞の生活力は轉傳して人類に至り、吾人は之を父母に享け、更に又子孫に傳へて無窮に至るべきものである、夫で吾人は無限に連續する生物界の一現象一波瀾であつて、如何なる英雄豪傑も、此の連鎖より脱逸し得べきものではないと云ふのである、科學の説明は如何にも事實である、吾人は過去にも未來にも、無限に連續する現象世界の一波紋に相違ないのである、夫で吾人の存在は、過現未の三世に無限に連關して居るものである、又吾人が現に占むる所は、膝を容れば足るのであるが、此の膝を容る場所は、種々なる關連を有つて居るものであつて、地球、大陽系、天体と漸次に、其關係を廣め、又吾人が一日の生存に要する空氣、衣食、住等の關係を推演すれば、地球上總ての物、總ての動物、總ての人類に關連するようになるのであつて、畢竟すれば渺たる吾人一箇の生存も、宇宙全体に關連して居るものである、即ち無限の時間と、無限の空間とが、悉く吾人の存在に關係を有するものである、ロツツエが存在すと云ふは關係することであると云ふたのは、



事實である、至言である。

更に一步を進めて、箇体的人、そのものに就いて考察して見れば、心理學者の教ゆる如く、吾人には心身の兩者、即ち内界と外界、精神的現象と、肉体的現象とがある、夫で吾人を外界より、客觀的に考察する時は、所謂自然界の法則に全然支配せらるゝものであつて、草木、禽獸と更に撰ぶ所はない、飢ゆれば一種の衝動に由つて食を求め、其の生殖を欲するも、其の不快を避け快に就かんとするも、植物の向日性、向水性や、雄蕊が自然に雌蕊に接せんとする作用に異なることはないのであるが、更に之を主觀的に觀察して觀れば、吾人の心意は其初め、無意識的に活動したもので、盲働作用の結果外界に觸發せられて、快不快の感を生じ、快に就き、不快を避け、自家保存の性を現はし、夫より漸次開發して、諸種の感覺が現はれ、感覺より知覺、記憶、想像、推理となり、遂に高等の認識作用に進みたるものである、而して此の認識作用が醇化したる時は、自覺となるのであつて、吾人々類は自覺作用に由つて、自己の状態を認識し、彼此の關係を覺知し、それに由つて以て、自己の行動を規定することが出来るようになるのであると、心理學の教ゆる所は事實であらう、併し吾人はこれ丈に

て、人生の意義を解し得たりと云ふべきであらうか、勿論科學は説明である、目的ではない、規範ではない、吾人はこれ以上に、更に求めて止まぬのである。

倫理學者曰く、吾人は自覺作用に由り、萬有には秩序あり、意義あるものであると云ふことに到着することが出来る、こゝに至つた時は、先きの自然界は倫理界と化し、自然法は倫理法と轉じ、眞、善、美の理想は意識せらるゝもので、之が人類の人類たる所以である、夫で人類は自覺的實在である、フイヒテの所謂道徳的實在であると云ふことになるのである。

要するに尤も完全なる倫理家の教ゆる所は、人間には自覺作用を有し得べきものであるから、それに由つて理想、即ち高遠の目的を定め、吾人は此の目的に向ふて近づくべく、進取せねばならぬ、發展せねばならぬ、從て其理想たるものは、眞、善、美の統合の上に成り立たねばならぬ、又吾人が進取の方法は、智、情、意の孰れを満足せしむべき調和的のものでなくてはならぬと云ふのである、此の教訓に由る時は、人生は或る意味に於て、即ち現在に完全でないのである、悲觀すべきである、併し又他の方面より見れば、吾人は歩一步と完全に進むと云ふ點に於て樂觀すべきものである、單



純なる樂天觀や、厭世觀は、之に對して全く價ないものである、又吾人は眞善美の理想に由り、知情意の満圓なる發達を圖るべきものであるとするなれば、シヨペンハウエルの意志否定の厭世主義は取るべきでない、小乗佛敎の寂滅主義も頼むべきでない、又感情的満足に傾ける、若しくは自己意志の擴張の爲めに他を壓伏せんとするが如き、本能主義や、所謂個人主義の如き、ニイチエ流を學ぶべきでもない、左りとて又自己意志の超越、即ち獨醒主義、隱遁主義に倣ふべきものでもない、歸する所は漸良觀に由つて、進取主義を執り、博愛融和的でなくてはならぬことになるのである、此が倫理學の敎ゆる所であつて、畢竟すれば、人類の長き經驗と、希望、想像とに由つて、吾人の行動を規範せんとするものである。

科學の敎ゆる所は事實である、倫理學の敎ゆる所は立派である、吾人は説明に由つて多くの智識を得るのである、吾人は規範に由つて、行爲を指導することが出来るのである、説明や、規範や、自覺の資料とはなり得るのである、参考とはなり得るのである、併し自覺そのものではない、吾人は哲學や科學を尊重するものである、併し其解釋を聞くのみでは物足らぬ心地がするのである、吾人は倫理學を尊敬するものである。

併し其の指教に盲従し、器械的に之を奉行し、遵守することは好まぬ、倫理道德の敎を以て、他の精神を拘束するのは、金殿に幽閉すると同じである、吾人は水草を追ふて移轉する民となつても、敢て金殿に幽閉されるを欲せぬのである、吾人は何所までも自覺の人となるべきである、自覺がなければ、智識も倫理も畢竟沐猴の冠である、斯の如き道德者が、世の罪惡を云々し、不道德者を責むるのは、冠を着けたる猴が、無冠の狸を笑ふのと均しく、寧ろ滑稽である。

只一つの自覺、この自覺さへあれば、最早倫理道德を云々する必要はないのである、發すればその節に中り、心の欲する所に從へども其矩を踰へぬのである、自覺は禽獸の生活より轉じて、人間の生活に入るの始めである、人生の意義は全く自覺に在るのである、自覺は個人的である、特有的で、他の力に由つて得べきものでもなく、又之を言説に由つて表示し得べきものでもない、倫理でもなければ、哲學でもない、他より觀れば神秘である、自觀よりすれば兎に角事實である、不可思議なる活力である、威權ある支配者である、命令である、斯くの如き自覺は、他より受くべきものでもない、又他に分つべきものでもない、全く各自に持有のものであつて、之を説明すること



とは出来ぬものである、併しながら如何にして自覺に到着したか、自覺して汝は現在如何なる考を有して居るかは、多少之を形容し、表象し得ぬではない、乞ふ吾人が自覺の前後に就て語らしめよである。

吾人は屢々倫理學者の教ゆる所を實行せんとして、屢々中止したものである、吾人は多くの哲學説に惑はされたのである、吾人は會堂に行き、寺院に行つた、併しながら彼等は遂に吾人を救はなかつた、吾人は實に懷疑したのである、煩悶したのである、幸ひにも兄氏の助言に由つて、今は總ての苦惱も取り去ることが出来たのである、吾人は實に懷疑煩悶に由つて、自覺したのである、固より吾人の懷疑は大したものではなかつたが、我が兄氏の如きは、幼年より人世の逆境に立ち、十五年の久しき間、人生問題に煩悶したのは事實である、兄氏が常に曰ふのは、今日を以て以前を顧みれば、全く猴であつた、人間の眞似ばかりやつて居つたと、そこで吾人は、人生懷疑のないのは不幸である、自覺のないのは猴であると斷言して憚らぬのである、吾人は斯の如き逆路より自覺と云ふような境遇に達したのである、そうして吾人の今持て居る人生の解釋は、左の如くである、實に單純なるものである。

總てのもの、即ち萬有の一切は、皆な活動して居る、日月星辰も動いて居る、動物は勿論、植物も生々として居る、金石の如きでも其分子は斷へず旋動して居るのである、活動と云ふことが即ち生命である、活動が宇宙萬有の根源である、眞相である、活動がなければ何もものもないのである、換言すれば萬有と云ふも、世界と云ふも、唯一の活動に過ぎぬのである、世界の原理は、物でもない、心でもない、活動それ自身である、活動は唯一の實在である、この活動實在が發動する形式を、物心の現象と云ふのであつて、物をも心をも貫通して居る原理は活動である、その活動發現の程度の大小多寡に由つて、萬有は差別せらるゝのである、有機無機と分れ、動植物と分たれ、人獸虫魚と區別さるゝのである、夫で實在の圓滿なる顯現は、尤も能く働くものに在るのである、即ち働けば働くだけ實在の顯現が完全に圓滿になるのである、無生物は生物に比して劣等であると云ふのは、活動の度に大小があるからである、動物と植物との比較、其他一切これに外ならぬのである、彼の野蠻人は飢へて漸く食を求め、飽けば寢るから、文明人の社會公衆のためにより多く働くのに比して劣等であるのである、人間でも食ふて生殖するだけの活動をするのは、下



等動物と同類である、又食はず生殖もせぬ羅漢輩は、殆んど無機物と同一位に在るものである。

夫で吾人はより多く活動せねばならぬ、空間的には尤も廣く、時間的には尤も永く活動するのが、尤も大なる善である、夫で人は衛生に注意して、長命で久しく活動することの出来る心掛けが肝要である、又一家の爲めに働くのは一身のために働くよりは、廣い活動であるから、それ丈、より大なる善である、又社會公衆のため乃至人類全體のために働くのは、それ丈漸次善の程度を増すのである、範圍が廣くなるのである、そんならば泥棒も喧嘩も矢張り活動であるか、善であるかと云ふ疑問があるが、それ等は眞の活動ではない、實在即ち活動の本質に順應せぬで、逆抗する所の作用、即ち活動を防止する所の動作であるから善どころではなく、大なる悪である、泥棒や喧嘩の結果は、夫より次の活動を中止するようになるではないか、夫で病氣とか、怪我とか、酒に酔ふて翌日の仕事の出来ぬ等云ふようなことのあるのは、皆悪である。

夫から又活動が善であるならば、寝るのや休息するのは悪かと云ふ説があるが、此

は疲勞を回復するのである、第二の活動の準備である、病氣や喧嘩して怪我して休むのとは全然異なるのである、準備は活動の一部分と云ふてもよい、それで働いて寝又は休息するのは、矢張活動の範圍と云ふてよいのである。

要するに活動と活動の準備とは善である、而して活動の廣く永きだけそれだけ大なる善である、之に反して怠惰尸位素餐及活動を抑止するような結果を來すことは皆悪である、而してその活動を抑止する結果の永く又廣きだけ、即ち自分二人の抑止に比して社會多くの人の活動を抑止するが如きは、それだけ大なる悪である。

之で以て見れば金持の隠居等が、食ふて遊んで居るのは一種の罪惡である、紳士等が歩るいても差支ない場合に、體面とかなんとか云ふて車にでも乗るのは、矢張罪惡である、今の金持や貴族等の生活法は、凡俗的には高尚な生活であるかも知らぬが、兎に角心身を勞せぬで食ふと云ふことは一種の罪惡である、車夫や米搗が終日勞働して居るのや、寫字生が孜孜として終日筆を執るのや、其他學術のため、公共のため苦心經營せらるゝもの、均しく神聖なものである、高尚なものである、よし大小の差はあつても、均しく善である、宇宙の目的、人生の本意に協ふて居るもので



ある。

滯留不動の水は腐敗するものである、社會の腐敗、道德人倫の頽廢は、其第一根源は皆働かぬで、遊んで食ひたいと云ふ考に在るのである、一切の罪惡は悉く放逸遊怠に起因せぬものはない、閑居不善を爲すとは千古の眞理である、活動すれば心身共に壯快である、無聊科苦しいものはない、夫で人々各々其爲すべき所に向ふて働けば、世は無事である、家内は安穩である、心身は壯快である、働いて休息する所は涅槃である、何の不平もなく楽しんで忠實に働くのが菩薩である、蓮臺や百味の御食は働いて食ふもの、働いて休むものの家に在るのである、貴族や紳士の珍膳も、車夫の夕飯、吾々の腰辨當には及ぶまい、要するに遊んで甘いものを食ふと云ふことは、ドーシテモ出来ぬことであるのに、夫を心掛るものが澤山ある、之等が社會を腐敗させるパチルスである。

何でも活動の神聖なることを自覺して、出来得る限りの働をなすのが肝心である活動は生命である、活動のないのは死である、所謂生命はあつても働かぬものは死人と同様であつて、死人よりは食ふだけ衣るだけ、それ丈の罪である。夫で吾人は

所謂労働者を尊重し、忠實に各自の職務に勉勵するものを尊敬するのである、神聖視するのである、尸位素餐の輩は一見立派なようであつても、哲學的には下等動物である、死骸である、罪惡であると云ふのである。

勿論自己の利害を打算し、利益に向ふてのみ働くのは、卑劣であるが、人生は働くべきものであると云ふ自覺を中心として働くのであれば、働けば働く程、品性も陶冶せられ、修養せらるゝものであつて、別に修養とか、向上とか云ふに六ヶ敷ことを云はぬでもよいようになるものである。

夫から又善惡應報とか、福德の折合等穿鑿する必要もないことになるのである、甘いものを食ふて、甘くないと云ふのは働かぬ制裁であつて、食物に乗てられたのである、實に残酷の罰である、働けばまづいものでも甘いと云ふのは、これに越したる報酬はあるまい、食事一つですら、斯の如く嚴平として犯すべからざる應報があるのである、未來の存在や、財物の多寡、人爵の高下等に就て、善惡の應報を云々するのは、如何なる必要であるかは知らぬが、吾人はそれに耳を貸する暇はない、吾人は只働くのである、そうして時期が来れば、兎に角、永く靜かに絶對の懐に眠



るのである、かく吾人は永き眠に就ても、吾人の活力は、或は子孫の上に、或は其社會に於て、無限に連続して、酬因因果の法則に支配せられ行くものである。要するに吾人の人生に對する考は、天地萬有の事實より、若しくは自己の實驗より歸納して、何でも活動すればよい、より多く活動せねばならぬ、利害の打算以上に、人生は活動すべきものであると自覺して活動せねばならぬ、それ以上には何の穿鑿も要せぬと云ふ、極めて簡潔のものに歸結するのである。

吾人の人生觀は斯く簡短なるものである、理窟の上から見れば間違ふて居るかも知れぬ、又説明の足らぬ所もあるであろう、併し之が吾人の實際の信念である、吾人は此信念に由つて働いて居るのである、此上には最早宗教も倫理も必要はない、社會主義とか、國家主義とか、個人主義とか、ナントカカトカ實に擾々たることではある、唯、活動主義、一つの活動主義、此にて吾人の事は足るのである、動機論も、結果論も、今では研究する必要がなくなつたのである、噫、活動。

### 第三、倫理と宗教

所説の如何は暫く措いて、兎に角、倫理は、人生の規範である、人は動物以上の倫理的道德的實在である、吾人は吾人の所謂自覺するまでも、倫理の規範に従ふて、行動せねばならぬ、倫理は自覺せぬものを羈束して動物以上のものたらしむる大なる責務を有するものである、又既に自覺したるものであつても、倫理的に活動せねばならぬことは固よりである、併し茲に最も深く注意せねばならぬことがある、夫はいくら倫理的と云ふても、自覺せぬものは、所謂狝猴の冠で、非倫理的のものと畢竟は十歩百歩の相違に過ぎぬのである、夫から又既に自覺したるものは、倫理の規範に由つて行動云爲するのではなく、その行動が自ら倫理に符合するのである、それで敢て客觀に倫理の規範を要せぬのみでなく、時には客觀的倫理の不完全、不合理なる點と衝突して、之を破壊せんとすることがある、そうして其の結果は健全なる新なる倫理を醸出することになる、こう云ふ意味からして、自覺は倫理以上と云ふことも出來、眞正の倫理は自覺に基かねばならぬと云ふてもよいのである。

宗教と云ふものは、此の自覺に達する方法手段を授くるものであると思はれる、自覺する方法は、人に由つて異なるものである、或は意的倫理的方面より入るものもあ



ろう、或は智的理論的方面より入るものもある、或は情的詩的方面から入るものもあるであらう、此の意味から云へば倫理も一つの宗教である、そうして自覺に到つた所は、神である、佛である、自覺後に活動するのは、菩薩である、聖人である、偉人である、宗教的生活である、自覺的活動である、復活せる生命である、絶對が個體の形式に由つて、制限せられて居つたのが、自覺に由つて自在の活力に復つたのである、這般の境界は、之を他に對すれば、絶對の愛とも云ふべきものとなるのである、又他から見れば神聖である、眞である、美である、善である、自觀すれば全く無我である、絶對の活動である。

噫、自覺、吾人の所謂自覺的宗教論よりすれば、倫理即宗教とか、宗教即倫理と云ふような議論はとうでもよいのである、又理想的宗教等云ふことは、殆んど意義を爲さぬのである、理想と云ふことは、倫理上に用ふべきである、一つの希望である、寧ろ空想である、但し此の理想に由つて、吾人の行動を策勵し得ることは事實である、然るに吾人の所謂自覺は、倫理上に所謂理想の現實である、絶對融通の境界である、理想も、倫理も最早必要のないのである、有るものは只絶對の活動である、無

我である、平等である、理想、倫理を超越して居るものである、従つて又常識主義とか、精神主義とか、神秘主義とか云ふ差別を認めぬのである、其の或時は常識的であるであらう、或は精神的でもある、又或る場合には神秘的であり得るのである、併し是等は皆他觀である、自觀には唯一不可思議即ち宇宙全体に共通せる、所謂實在無限と冥合せる唯一活力の發動である、即ち絶對的の活動あるばかりである、善惡を超越したる絶對の善である、醜美の相對以上の絶對美である、愛憎以上の絶對愛である、そこでその動くや節に中り、憎くむべきを憎む、即ち絶對愛より出でたる憎となるのである、絶對の愛の前には、親子兄弟とか、他人異民族人獸等の區別はないのである、絶對善の前には、或る場合には法律も其威嚴を失ふものである、況んや人爵の如きをやである、絶對美の前には、平灰の合否や、色彩の適否等は、殆んど價のないものである、山水の美は、岩石や樹木の配合如何よりは、其の中に存する活力、即ち所謂山川の靈氣、そのものと交渉したる實驗にあるのである、美術の美は、作者の精力そのものの程度に由つて價値が上下せらるゝのである、即ち作者の活力と見る者の活力との交感に由つて、美の價を生ずるものである、夫と均しく吾人が佛教を信



するのは八千余巻の經論や、又今の寺院僧侶佛像を信するのではない、只之等を通して、此等のものを資料として、釋迦の自覺的活力そのものに交感せんとするのである、基督教でもその通りである、それで吾人の眼中には、教派も宗派もない、釋迦や孔子や、基督や、ソクラテスの人格があるばかりである、その自覺せる活力を尊敬し、崇拜するのである、吾人は斯の如き意味に於て、多く藝術家、即ち各種の偉人の崇拜するに吝ならぬのである、又莊嚴儀式の如きも、此の意味に由つて、吾人が絶對の活力に交渉する資料として、或る程度の必要を説くものである、若し此意味を忘れたならば、美術を見て、勝景に對しても、眞の美を感ずることは出来ぬ、又宗教を信じて眞の宗教の趣味を解することは出来ぬ、佛教の味も、基督教の味も、儒教の味も、分かるものではない、虚偽の信仰である、自覺等は到底思も寄らぬことである、つまりは自負、陋劣、猜疑、排擠の墮落より他ないのである、寧ろ憐むべきである。

吾人の所謂自覺的活動主義は、倫理であるか、宗教であるか、それは何でもよい、取捨は世の學者に任するのである、兎に角之が人生の實驗である、實際の信念である、

吾人はこれ以上に所謂倫理とか、宗教とか云ふものに依頼せぬでも、人生に處して、餘り多くの恐を懐かぬのである。

倫理、宗教以上であると云ふこと、即ち所謂倫理や、宗教に依頼せぬでも、決して倫理の教ゆる所に違背せぬと云ふことと、非宗教、非倫理、背道徳主義とを、混同してはならぬ。

#### 第四、社會と個人

吾人は既に、吾人の考ゆる所の、宇宙の有様や、人生の意義を表白したのである、之で最早萬事了つて居る、此の他に何にも論ずる餘地も、必要もないのである、併し此れ丈では、世人は或は餘り主觀的である、所謂精神主義の極端に墮するものであると、誤解するかも知れぬ、全體吾人の自覺と云ふのは、易く例して云へば、孔子の不惑の境界に至つたのと同じであつて、その自覺後の活動は、所謂心の欲する所に従へども矩を踰へず底のもので、敢て主觀に偏したものでなく、又社會を撥無する底の個人主義でもないのである、併し叩いて之を盡すと云ふことは、宜しいことであるか



ら、此には更に社會と個人との關係を、吾人の立脚地から、多少解説して見よう。社會とは一體何であるか、社會は各個人が、共同生活の目的を以て集合した團體である、全體吾人々類は、經濟的要求とか、繁殖の須要、又は防禦の必要、所謂生存競争の必要上からして、相集合して社會的活動を爲すに至るものである、そうして其の同伴に對する、同情的恐怖とか、同情的快樂と云ふものが出來て、社會的結合をして一層牢固ならしむるものであつて、言語の發生、思想の交換より、段々と進んで共通の審美的快樂、道德的生活、宗教的信念等を發生し、此に風俗習慣を造るに至り、遂に社會精神と云ふものが形成される、ものである。

社會が有機體であつて、生命をもつて居るばかりでなく、種々なる精神的作用がある、と云ふことは、今日では争はれぬ事實であつて、社會の意志は、毎に吾人を規束しつゝある、吾人は容易に此の規束を脱することは出來ぬものである、併しながら又翻つて社會精神なるものの成素を檢する時は、畢竟其の社會に生存せる一切個人の意志を綜合せるものに外ならぬのである、其の社會を組織せる種族の經驗の總果に過ぎぬのである、かくの如く社會精神は、個人心意活動の化成ではあるが、個人心が社會化

して、既に社會精神となりたる上は、それが言語文章等の媒介に由りて、再び個人化せられ、個人精神を育成するに至るものである、夫で個人の精神、品性は、本來個人の所有であると同時に、社會の所生である、個人の精神が社會化して、社會精神を化成すると共に、社會精神は亦個人化して、個人の精神を化成するものであつて、社會の精神は其の社會に存在する、個人の精神を網羅せるものであるとするならば、吾人が社會精神に融和することは、一切の個人に融和したるのと同量であつて、しかも此社會精神と云ふものは既に我が個人精神中に存するものである、即ち社會精神は我が精神であるのであるから、自己の良心の命する所に従ふて活動するのは、社會精神に融和し、一切の個人の意志と融和し得べきものであると云ふて差支はないのである、良心を中心とすることは、即ち社會を中心とすることになるのである、此の意味に於ける動機論は、結果論の偽善に墮し、結果轉環の際限圍り難きが如き、欠點を棄て、其の主張點たる社會の要求する行動、所謂功利を包攝するものであつて、動機結果の争や、個人主義、社會主義、主觀的とか、客觀的とか云ふ議論は、之を繰返す必要のないことになるものである。



併しながら、茲に一つの注意すべき事柄がある、夫は社會の精神即ち時代思想と云ふものは、大抵一定の平準點をもつて居る、換言すれば、社會精神は一つであるが、其社會に存在する個人の精神は、全然同一平準點に歸着することは出来ぬ、即ち社會精神以下に在る個人精神もあれば、社會精神以上に位する個人精神である、前者は所謂凡愚の徒であつて、後者は所謂偉人である、夫で凡愚の徒は自己の良心の命する所に従ふて行動しても、其結果が往々社會精神、即ち時代思想の容れぬようなことになることである、併しそれであるからと云ふて、之は惡である、動機論はいけぬとは云へぬ、時代思想の容れぬ所であつても、善は矢張り善である、即ち古風な善である、社會は之を誘掖すべき義務があるのみで、決して之を咎むべき權利はないのである、又偉人の思想は、時代思想以上であるから、其の時代に容れられぬことが多い、けれども此の偉人の思想は、遂には社會化して、社會の精神はそれだけ向上して來ることになるのである、夫で偉人の思想と、時代精神と相容れぬのは、保守と建設との衝突である、此の衝突を重ぬる丈それだけ、社會は向上するのである、發達するのである、夫で吾人は時代精神以上の思想を有する偉人を尊敬せざるを得ないのである。

由來保守と建設とは、社會にても、個人にても共に、具有するものであつて、共に必要であることは、云ふまでもないことであるが、保守的方面は守舊固陋に墮し易く、建設方面は破壊に失ふことがある、建設の成就した所は、個人で云へば自覺の境界である、社會で云へば黄金世界である、即ち社會精神が偉人の思想と同一地位に達した場合である、社會の自覺である、此の意味から云へば、釋迦の如き、孔子の如き、基督の如き、自覺の偉人が昔に在り得たと均しく、黄金世界は、或る時代に現はれ得たのである、併しながら又一方より見れば、偉人の思想も、普通人の思想も、凡愚の思想も、悉く一致せねば、純粹なる社會の自覺、即ち社會精神と、此社會を組織する個人全體の思想の融合と云ふ譯にはゆかぬ、個人全體の思想の全然一致すると云ふことは、到底不可能であつて世は如何に進化するも、物質的文明は如何に發達して、貧富なく、何人も金殿玉樓に住し得るようになったても、品性の高卑賢愚を平等ならしむることは出来ぬから、黄金世界の現出は到底不可能であると云ふて差支はない。然り而して、社會に濁清の別を生じ、個人に品性の高下、凡聖の異なることのあるのは、一に自覺の如何と、活動の大小に由るものである、自覺があつて、より多く活動



するものは個人としてエラキのみでなく、此等の個人の多いだけそれだけ、社会は進化發達するのである、此等の偉人の品性が社会化して、社会の品性も亦向上するのである、自覺的になるのである、活動が盛であるのである、要するに社会を立脚地としても、個人を中心としても、自覺と活動と云ふとは極めて肝要な事であつて、此がなければ人生も社会も全く無意義のものになり了るであらう、ロングフェロウの働け、活ける現在に働けの歌は、吾人に善き教訓である、吾人は飽迄努力せねばならぬ活動せねばならぬ。

### 第五、死の解釋

宇宙の真相を解剖し、人生の意義を究極し得たる以上は、最早の死の穿鑿を要するものではない、併しながら古來死の問題が、最も深く大に人の心を悩ましたものであつて、靈魂論の今に至るまで云々せらるゝことであるから、吾人も亦簡單に一言を加へるのも、全く無用ではあるまい、全體靈魂不滅論や、カントの道德律論の如きは、其由來する所、全く人生の意義を究め盡さぬより起つたことであつて、地獄、極樂、

天國說等皆同一陷缺に陥つて居るのである。

吾人の人生觀に由れば善惡の應報を、未來の他世界生活に求むる必要はない、福徳一致は不完全なる此世に期し難い、福徳一致せねば、道德律は成立せぬ、人生の意義は滅却すると云ふものもあるけれど、福とはドウ云ふものかは、到底一定することは出来ぬ、人世には其の活動に應じた丈の効果は即時に、否、其の活動中に既に現はるゝものである、顔回が貧で天であつて、盜石が富んで壽であらうとも、其は眞の應報には、余り多くの影響あるものではない、盜石の壽と富とは、寧ろ彼を苦しめる惡魔であり、鐵鎖であつたかも知れぬ、必ずやそうであつたに違いない、一瓢の飲、一簞の桑、其樂を改めぬ、回が貧の高尙なる味は、利己的の倫理學者や、迷信的の宗教家等に分るべきでない。

殊に又惡人の働さや、其の精神はいくら社会に影響し關係はして居つても、社会精神の形成發達の上には淘汰の法則に由つて排撥せられ、善人の活動、精神は全く社会化して、社会精神の要素となり、以て感化力を無限に維持し、永久の生命、永久の尊重を有するではないか。



又吾人が活動の結果は細胞の活力に由つて、子孫に遺傳し、永久の生活を繼續するではないか、積善の家に餘慶あり、積悪の家に餘殃ありと云ふことは、此の方面より見たる事實である。

活動に伴ふ、直接の應報、社會化したる永久の生命、子孫に連續する無限の生活、此れ以上に猶何等かの結果を求むる必要があるであらうか、若しありと云ふならば、吾人はその慾張りの甚しきに驚かざるを得ないのである。

然らば死とは如何に心得ゆべきであるか、死とは物理的生理的法則に従ひ、榮枯盛衰の自然法に由つて、草木の果實を結んで後、朽枯すると均しく、跡を第二の自我たる、新生活力を有する子孫に譲りて、此にその生活力を休止し、その不用にして、娑婆の塙塞たる肉體をば、之を各元素に放還するまでである、自觀すれば死であるが、大局より見れば不用を以て有用に代へ、新なる生活を開始せしめたのに過ぎぬ、従つて又吾人は活動し得る限り活動したる以上は、必ずや死なねばならぬ、生きて居るのは却つて邪魔である、死ぬるのは合理である、當然である、戰了つて後はイヤデモ凱旋せねばならぬのである。

更に又眼を轉じて宇宙の方面、即ち絶對の側に立ちて、死の解釋を下す時は、死とは絶對の活力が、肉體と云ふ個體の形式に、制限せられて居つたのが、其拘束を脱却して、絶對に還元するのである、善惡、醜美、眞僞、我他、彼此の總ての相對を超越したる、絶對の我、絶對の眞、絶對の善、絶對の美に歸するのである、所謂無上の天國、無限の極樂に往くのであると云ふても差支はないのである、死は實驗以外である、夫で人生の實驗より反推する外はない、而して死に對する解釋にして、これ以上を云々するは、吾人人生の實驗に反するものであると同時に、これ丈にて死の意義は、充分明瞭であり、穩當であることは信じて疑はぬ所である。

### 第五、結 論

吾人は宇宙萬有を考察し、吾人の實驗し得る轉變活動の相その儘を以て、これが宇宙の眞相であり、萬有の本性であると断定した、従つて人生も亦此の萬有の本質に順應して活動すべきものであると覺知した、そうして、人生に吾人の實驗し得る如く、意義あり、目的がある、そして宇宙萬有に一定の秩序あり法則あるそれとを對照して、



宇宙にも亦目的あることを解し得た、夫で吾人は此の人生宇宙の目的に近づくと、宇宙人生の本質に従ふてより多く活動すべきものであると決定した、而して吾人が此の自覚と活動とは、漸次社會化して、社會精神となり、社會精神は又個人化して、各個人も社會も俱に共に、自覺的活動的となり、以て當初の大目的に近づくと、發展するであると云ふことに想到した、そうして一定の期間を経過すれば、吾人は跡を第二の新生活力を有するものに譲り、生前の活力は社會の感化力と化して一方に永久の生命を有し、又子孫の上に連続の生活を托し、他方には個體的形式の拘束より脱して、靜に絶對に還るのであると云ふに歸結した。

要するに吾人の主張は、吾人が自覺の撮影である、人生の實驗である、何教派でも、何學派でもない、又何主義でもない、強いて名づけて、自覺的活動主義とでも云ふ可か、絶對的努力宗とでも唱へようか、名はなんでもよい、吾人の所信は名稱言説以上に在るのである。兄氏常に曰く、先づ言ふ勿れ、行ふて而して後に、止む得ざるに至つて、少しく説明せよと。

## 活動 教 終

### 宗教研究會錄事

#### ●起源及經過

斯く信ぜよと云ふは壓制なり、吾人は何が故に、まか信ぜざるべからざるかを問ふの權能あり、我が教法のみ無上なり、眞實なりと云ふは獨斷なり、偏狹なり、吾人には多くのものに就いて、之を批判するの理性あり、而して後、其の尤なるものを取るは、實に吾人が自然の義務なり、自由討論は信仰を亂るの恐ありと云ふは卑怯なり、研究の爲めに亂るゝ如き信仰は、眞正の信仰に非ず、堅固の信仰にあらず、斯の如きは、寧ろ之を破壊して、懷疑悶を重れ、然る後、究竟眞實の堅固なる信仰を獲得すべきのみ、吾は既に信仰を有す、更に研究の要なしと云ふは怠慢なり、人は死せざる限りは、研究に研究を加へ、以て瞬間も向上の工夫を怠るべからず、信ぜんと欲せば、先づ研究せざるべからず、然り而して、研究は公正なるを要す、公正誠實の研究は、之を教權擁護の場所に於て、教權主義者にのみ求むべからず、宗教研究會の起る、豈夫れ偶然ならんや。

吾人同志の徒、時々相會して、理義の穿鑿、信念の安立に汲々たるや久し、其結果、昨明治三十六年四月の頃、各大家を招聘して、其見解を聽かんとの議起る、而して其の大家の講述は、少數のもの、之を私せんよりは、廣く同好の士に頒つに如かずと爲し、遂に宗教研究會なる名稱の下に、之を公表するに至れり、爾來今日に至るまで、毎月一回、各大家の講演、及會員各自の討議、談話を執行し、昨年八月一日より、同七日までは、都文館に於て、連日講演を開き、同十日より、二十五日までには、天台大學に於て、夏期講習會を開き、又今三十七年一月三十一日には、早稻田清源寺に於て、臨時講演を開けり、又特別事業の一部として、宗教大觀の編輯、出版を爲し、教界偉人叢書發刊の計畫、并に其第一編弘法大師傳の編纂、發行、活動教の發刊を爲せり、此他宗教俱樂部建設の準備に着手しつゝあり。



本會講演回数十八回、聽衆通計三千百七十八人

同 講習日數十五日、講習者通計九百八十人

本會々員現在數……本年一月末統計……百六十三人、内委員八人

●講師姓名 (講演版)

文學博士：松本文三郎君。小野藤太君。境野哲君。田中治六君。文學博士：蟹江義丸君。海老名彈正君。望月信亨君。中島德藏君。文學士：祥雲確悟君。關透君。加藤咄堂君。高島圓君。佐治實然君。廣井辰太郎君。文學士：村上龍英君。文學士：融道玄君。文學博士：前田慧雲君。文學博士：井上圓了君。文學博士：井上專精君。長谷川泰君。文學士：近角常觀君。文學士：遠藤隆吉君。文學士：加藤玄智君。

●翼賛せられし人名

文學博士：井上哲次郎君。講師紹介等。一行院八木君。蓮光寺戸田君。大善寺澤君。眞淨寺田君。法眞寺石井君。郁文館主棚橋君。同幹事高橋君。天台大學職員諸君。清源寺君。以上會場貸與。八木信剛君。大谷春風君。遠賀亮中君。野呂瀨君。藤本遼田君。峯玄光君。高島圓君。小林雨峯君。櫻井榮山君。清水君。今村君。善雄寺。以上諸事幹旋。餘他は之を略す。

●宗教研究會綱要

我邦維新以來、先づ物質的方面より起り來れる文明は、其必然的順序に由り今や精神的方面に及ばんとして、新舊の思潮互に衝突し、茲に端なくも過渡の時代を現出せり。過渡の時代は研究の時代なり、研究の結果にあらざれば、取捨其當を得る能はず、研究の功を積むにあらざれば、穩健の建設を全うする能はず、現時の急務は破壊にもあらず、建設にもあらず、唯誠實なる研究に在り、然り而して研究は學問的にして、信仰的なるべからず、又從來の如く、一宗一派一家の範圍に踳躄して、井蛙的の見解

を弄すべきにあらず、須らく神儒佛耶各宗派は勿論、東西古今に現はれたる總ての宗教道德に向つて、力めて虚心平氣に、公正誠實の研究を加ふるを要す。

吾人は如上の趣意により、茲に宗教研究會なるものを設立し、同志の徒時々相會合して、各自の信仰經歷、並に其研究の結果を表白し、或は定時若しくは臨時に、神儒佛耶各教各宗派の大家は固より、其他哲學倫理學等を研究せられたる碩學を招聘して、其講話を聴き、以て参照の資に供し、遂に進んで、新舊信仰道德の取捨を誤らずして、其穩健なる發展を圖らんとを期す。

●概 則

- 一、本會は宗教研究會と稱す。
- 一、何人と雖も本會員たることを得。入會せんとする者は住所姓名を事務所に通知すべし。
- 一、本會に評議員を置き一切の事務を決行す。
- 一、本會は毎月一回通會を開く。
- 一、本會費は會員又は其他の篤志者の義捐を以て之に充て會員全體よりは會費を徴收せず。
- 一、本會の爲め直接間接に助力を與へられたる者は翼賛員として永く其功勞を紀す。
- 一、本會の爲め講演せられたる者は賓師として永く尊重の意を表す。

●宗教研究會特別事業

- 本會は通常及臨時講演并に討議の他、更に特別事業として順次に左の諸項を實現せんことを希望す。
- 一、毎年夏期宗教講習會を開設する事。
- 二、同志俱樂部設立の事。
- 三、出版部設置及雜誌發行の事。



- 四、大講堂建設の事。
- 五、宗教大學設立の事。

●宗教俱樂部設立案

- 一、宗教俱樂部は同志部員の日曜其他閑暇ある毎に自由に召集し、教學上の談話又は讀書等を爲し、以て他の墮落し易き危險なる遊興を防護すると同時に、精神的慰撫修養の媒助たらしめんことを期す。
- 二、俱樂部は適當の場所を撰び、相應の家屋を建設又は買収、若しくは賃借して、之に充つる事。
- 三、俱樂部員及俱樂部設立費并其基本金募集の方法を左の如く定む。
  - イ、金壹圓以上を出資せしもの、又は金壹圓以上の出資者三名以上を募集せしものは本部員と爲す事。
  - ロ、金拾圓以上を出資せしもの、又は部員十人以上を募集せしものは特別員と爲す事。
  - ハ、金五拾圓以上を出資せしもの、又は部員三十人以上若しくは特別員七人以上、或は部員特別員合して其出資額百圓以上を募集せしものは評議員と爲す事。
  - ニ、部員は何時にも自由に俱樂部へ出入し、又部員の發起に係る集會等には實費にて俱樂部を使用せしめ、又宗教研究会の發行に係る出版物は印刷費にて分配を受くる權あるものとす。
  - ホ、特別員は部員の權利以上更に毎年講習會の隨意參聽、講義録の無代配賦を受くるものとす。
  - ヘ、評議員は俱樂部の利害得喪に關する一切の議決に参加するの權あるものとす。
  - ト、出資は五ヶ月間に五回以内に分納するも妨なきものとす。

猶賛成の志士は、多少に關せず、義捐を仰ぐ。

東京市本郷區  
勸坂町十番地

宗教研究会事務所

發行佛敎全書豫告

●第一編 佛敎倫理學……六百頁……近刊……發行は確實の書肆に托す。

●第二編 佛敎解脫論●三、華嚴哲學●四、眞言哲學。以上原稿既成。

●五、法華哲學、●六、唯識哲學●七、起信哲學●八、三論綱要。以上初稿終了。

●九、淨土敎哲學●一〇、佛敎戒律論●一一、俱舍綱要●一二、碧巖錄。

●一三、從容錄●一四、成實綱要●一五、印度佛敎史●一六、支那佛敎史。

●一七、日本佛敎史●一八、敎系年鑑●一九、佛敎字彙●二〇、佛敎大家名鑑。

▲以上各篇共六百頁内外▲定價約壹圓叁拾錢▲順次發刊

右は本會特別事業として、誓て完成を期し、敎界の爲め、聊か微衷を致す、敢て大方の愛讀を乞ふ。

●環約出版には非ざるも、環約購讀申込者には、郵税を免す。

東京市駒込  
勸坂町一〇  
宗教研究会編輯部



### 活動教の發表に就て

宗教 萬能時代は、既に過去に落謝した。哲學は神に供へたる美人と均しく、優逸の美を表するも、人生に直接の効果を提提供するの吝なるには失望した。左りとて科學全盛の時代も、亦餘り久しからぬ傾が見へる。宗教は必要である。哲學は尊ぶべきである。科學は重すべきである。然るに今や所謂成立的宗教は疑はれつゝある。哲學は少數學者の翫弄物視せられつゝある。科學は其の活ける血に乏しきに飽かれんとして居る……迷信……空論……物質主義等の冷評の矢は、盛に放たれつゝある。此に於てか國家的忠孝論は、復活された。先天的良心論も、新術語に籍つて再現した。常識的道徳論も、當世流の解釋の下に、開現した。實驗的宗教論も、難有そつに鼓吹されつゝある。奇蹟的神秘論も、新なる裝飾に助けられて、將に蘇生すべく準備されつゝある。吁、噫、而して、原始の民族が遺されたる疑問……自然の歸趣……人生の眞意義……は、千古の疑問として、今猶明らかに解答せられぬのである。否、少しつゝ解答せらるゝと、同時に、疑問の度は益々増大せらるゝのである……懷疑……煩



悶……失望……墮落……無慘……之が現時の實況である。

然らば自然の歸趣、人生の眞意義は、遂に不可解であるべきか。咄、元來人の思想能力は千差萬別である。而してその未だ宇宙人生の疑問に到着せず、獨り自ら恣にするものは、所謂醉生夢死の徒であつて、禽獸の群に伍すべきである、又彼の日出て耕し、日入つて息ふ、良民の如きは、未だ理論的に、組織的に、宇宙人生の問題を解釋したのではないけれども、不知不識、自然の歸趣、人生の眞意義に順應したものであつて、何等の不平もなく、穩かに、終生を過して、遂に靜に絶對の懷に眠ると云ふことは、實に嘉すべきである、羨むべきであるのである。

又彼の所謂唯物論者にせよ、唯心論者にせよ、若しくは迷信家にせよ、それが自己の自覺に基づいて、確固たる主義となつて、其人の終生を規矩し、一切の行動の中心となるものであつて、人格を醇成したものであるなれば、其の價値の多少は兎まれ、確かに宇宙人生の問題に一つの解答を與へたものである……主義ある人である……尊ぶべきものである、決して輕蔑すべきではない。唯忌むべきは、自覺も何もなくて、宗教や學問を商法にする輩である、此等は醉生夢死の徒よりも、或意味に於て、一層

劣等である、寧ろ憐むべきである。

宇宙人生の大難問……之を解答する方法は、二途あるのみである、曰く須らく此の難問に遭遇せざれば、よし遭遇するも、汝の眼を閉ぢて、知らざると爲して、以て、所謂不知不識帝の則に従ふ良民となれ、此れ其の一途である。曰く須らく自覺せよ、自覺するには又四種の法がある、一は信仰的である、先づ何ものをか信じて、而して信じたる如く實驗することである、例へば念佛を信じたならば、念佛を百萬遍も唱へて、その局、唱ふれば彌陀も佛もなかりける、に至つて自覺するのである。二は道徳的である、先天内容の音に従ふて、積徳進取の結果、心の欲する所に従へども矩を踰へざるに至つれば、そこが自覺である。三は理論的である、懷疑に懷疑を重ね、煩悶に煩悶を積み、討究、精研の結果、宇宙人生に一箇の解答を加へ、一大主義を確立して、一切行動の指導を得、終生を之に托して、易らぬようになれば、そこは確に自覺である、四は詩的である、自然及美術の精靈に融化して、主我の觀念を消磨し、毎に實在即ち宇宙の精神に溶歸しつゝあるの境界は、正に自覺と云ふべきである。自覺に至る道途は數あるが、自覺そのものは同じである、均しく小我を没して、絶對



と冥合した境界である、個我に對すれば無我である、内容から云へば大我である。こゝまで来れば、宇宙人生の問題は自ら解釋されたのである、否、宇宙と人生、出題者と解答者と同一に歸して、難問は全く消滅したのである。神——全智全能……佛——一切智と云ふたのは間違ではない、孔子、基督、釋迦——全智全能である、一切智である、人であつて、しかも神である、佛である。個體の形式によつて、制限された絶對が、自覺によつて蘇生したのである、自由を得たのである。噫、自覺、吁、自覺、一つの自覺は、一切の紛議を粉截し盡し、人生の大道をして坦々として平かならしむるものである。自覺すれば、こゝに絶對の力が、現はるのである、眞……大……なる活動が生ずるのである。活動は絶對の本質であると同時に、萬有の實相である。従つて又吾人も、より多く、大く、活動すべきものであると云ふことは、吾人が理論的と實驗的との兩面より得たる、自覺の内容である。左の一篇は、吾人等が自稱、自覺に至れる徑路を、言説によつて、描寫せるものである、世の懷疑、煩悶中に在る人士に對し、多少の参考の資となることもやと思ふて、發表したのである。固より學説ではない、實際信念の表白である。

予に男兄弟五人あり、長は家に在つて、老兩親と三兒の間に狹まり、時々歌等捨れくつて、暮して居る。次は予、三十を過ぎて未だ家を爲さず、東西流離碌に飯も食へれど、所信を枉たこと丈は、ない積だ。次は某高等女學校の教諭として、人の子の正く生ひ育つを、此の上もなき樂と思ふとか云へり。次は米國に在り語學に通じ、金を儲けて大事業を起すべしと力味居れり。末弟は出で植田家を繼ぎ、近き將來に獨逸に航すべく勉めつゝあり、此頃人生觀の一篇を草して、予に示す、其の見る所、全く予に同じ、即ち多少校訂を加へ、活動教と題して、發表することにしたので、左は即ち夫である。

明治三十六年十一月十二日

小野藤太識



小野藤太主筆

# 靈

# 界

● 毎月五日發行

● 一部郵税共五錢

● 靈界は、教派宗派の拘束偏見を離れ、公平誠實に、宗教の眞髓を剔出し、健全の信仰を鼓吹す。

● 靈界は、毎號秩序組織ありて、首尾一貫せる、大家の論講を掲ぐ。

● 靈界は、労働者、軍人、學生、教育家、官吏、貴族、金持、婦女、僮僕、冒險家等あらゆる方面に、多大の福音を傳ふ。

● 靈界は、高尚優美、施本用の好冊子なり。

● 靈界第壹號要目 (二月十三日發行)

労働者の宗教……………労働の神聖……………天職の自覺……………報酬の貴重……………横議の誘惑……………品性の修養

發行所

東京市本郷  
四丁目五番地

文明堂



宗教研究會編輯

# 宗教大觀

定價六拾錢  
郵稅拾錢

本書  
 村上專精 祥雲確悟 海老名彈正 高島 圓 井上圓了  
 小野藤太 中島德藏 蟹江義丸 加藤咄堂 佐治實然  
 望月信享 前田慧雲 村上龍英 境野黃洋 廣井辰太郎  
 田中治六 松本文三郎 融 坂一

宗教學あり自由神學あり新基督教々義あり新佛敎主義ありユニテリアン敎綱要あり印  
 度敎大意あり淨土敎の發達を説くものあれば淨土眞宗の安心を唱ふるものあり禪と念  
 佛の關係を辯ずるものあれば教育と宗教との交沙を述ぶるものあり自殺を不可となす  
 ものあれば修養の必要を語るものあり春蘭秋菊美を争ひ芳を競ふ眞に是れ紙上の宗教  
 大博覽會なり世の宗教無用論を叫ぶもの宗教萬能主義に隨喜するものまづこの現代名  
 士の宗教論に聴くところあれ

教界偉人叢書第一編 小野藤太氏著

# 弘法大師傳

紙質特選。印刷鮮明。洋  
 裝總クローズ製。菊版  
 二百頁餘  
 ●上製價六十錢郵稅十  
 錢。並製價四十五錢郵  
 稅八錢

從來教界偉人の傳記、多くは神怪荒唐に亘り、且つ秩序組織なく、今日人心に感化を  
 與ふるに足らざるのみならず、却つて厭棄の念を起さしむ、茲に於てか精確なる偉人  
 の傳記を發行して、教界の欠點を補ふと俱に聊か感化に資する所あらんことを期し、  
 今や其第一編弘法大師を刊行せり、著者は久しく高野に在つて、最もよく大師を知れ  
 る者、材料精選、記事確適、筆力雄勁、千古の大偉人たる大師の眞面目躍如として目  
 睹するが如し著者曰く從來化物然たりし大師が稍々菩薩らしくなりしにあらざるやと、  
 志ある者は座右一本を離すべからず。

●國民、日出國、日本、二六、東京朝日、報知、讀賣、萬朝、等の諸大新聞、其他各  
 雜誌は異紙同調に著書の苦心と叙述の正確明晰、組織の完美なるを稱し、世の輕卒  
 の書に同じからざるを保せり。

●未だ三十日を出でざるに初版將に盡んとす。

## 發行所

東京本郷  
四丁目五

## 文明堂

賣捌所

東京堂。上田屋  
大坂吉岡書店。



小野藤太氏著

# 日本佛教哲學

定價六拾錢  
郵稅拾錢

稱して佛教といふその意一言にして盡きたるが如し而も翻つて之を惟ふにたゞ日本に現存するもののみを以てするも宗は十三派は三十三經論八千餘卷疏釋殆と數なしこれを探れば愈々深くこれを仰げば益々高くその歸趣得て測り知るべからざらんとすこゝに至て佛道に志あるもの遂に亡羊の嘆を發せざるものなし 茲に見る處あり多年の研究と特得の觀察とにより尨雜なる佛教を組織的に整理し巧に其の深邃の妙理を闡明し今や漸く此の大著を公にせらるゝに至れり其の文章簡潔勇健にして明透せる其組織順序の秩然たる此類の著述としては敢て絶後と謂はざるも蓋し全く空前なり苟しくも宗教、教育、哲學倫理等の研究に志ある者は必ずや一讀せざるべからざる所のものなり

●各新聞雜誌好評嘖々

●再版印刷中

小野藤太氏著

# 佛教八面觀

正價金參拾錢  
郵稅金四錢  
頗美本

本書は佛教の經論内に散見する議論を、創世、哲理、宗教、倫理、教育、政治、法理、處世の八方面より觀察して、之を分類組織し、以て現今の學說と對比評論せるものにして、其引用の經論二百九十餘部に及び、又卷首には闍轉史を揚げて、佛教變遷開發の概要を明にし、更に附録として、佛教全躰、若くは其各派に對する短評二十餘を載せたれば、一見以て尨大雜博なる佛教の内容眞面目を了解し得べく、學佛の士は苟も一本を懷にせざる可からざる空前の珍刊なりとす。



新佛敎同志會編輯  
野境黃洋小野藤太主記

# 將來之宗教

現代名士十三餘家肖像筆跡入  
定價七拾錢 郵稅拾錢

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひ其の將來の宗教に關する意見を叩いて茲に此の書を公にす

釋雲 照氏 元良勇次郎氏 大内青巒氏  
清澤滿之氏 海老名彈正氏 南條文雄氏  
坪内雄藏氏 前田慧雲氏 渡邊南隱氏  
澤柳政太郎氏 島田三郎氏 川合清九氏  
加藤弘之氏 大道長安氏 井上哲次郎氏  
片山國嘉氏 井上闔了氏 村上專精氏  
佐治實然氏 巖本善治氏 德富猪一郎氏  
江原素六氏 内村鑑三氏 田中智學氏  
釋 宗演氏 中島力造氏 浮田和民氏  
小崎弘道氏 黒田真洞氏 本多庸一氏  
島地嘿雷氏 植村正久氏 附錄訪問餘談

我徒は自由を尊重す乃強ひて同一典型の下に人を律するに忍びず敢て右種の信仰を開展し普く大方の撰擇に任ず

## 同

## 朋

文學博士 村上專精論述 小野藤太編輯

發行所

東京市神田  
御茶の水

光 融 館

● 毎月十五日發行

● 定價五錢 郵稅五厘

## 大 和 魂

小野藤太著述 目下品切

## 宗 教 原 論

小野藤太著述 目下品切

## 惟 神 之 大 道

● 宗教研究會編 ● 三月十日發行  
● 小野藤太講述 ● 定價六錢郵稅貳錢

### 要 目

建國事情と信仰思想。祖先祭祀と偉人崇拜。幽顯一致と神祕主義。惟神一貫と絶對精神。御祓祈禱と軌近心理學。宗教以上の宗教生活。



- 曉島敏氏著  
● 吾人の宗教 定價貳拾五錢 郵稅四錢
- 佐々木月樵氏著  
● 實驗の宗教 定價五拾五錢 郵稅拾錢
- 濱口惠璋氏著述  
● 青年の宗教 定價參拾錢 郵稅四錢
- 清澤瀨之氏、多田鼎氏、佐々木月樵氏、曉島敏氏合著  
● 佛教の信仰 定價參拾錢 郵稅四錢
- 文學士近角常烈氏著  
● 信仰の餘瀝 定價拾五錢 郵稅貳錢
- 濱口惠璋氏著  
● 心 靈上の修養 定價四拾錢 郵稅四錢
- 清澤瀨之氏著  
● 修 養 時 感 定價五拾錢 郵稅六錢
- 加藤咄堂著  
● 修 養 清 話 定價貳拾五錢 郵稅四錢
- 南條井上村上三博士自傳  
● 三博士佛教講演集 定價參拾錢 郵稅四錢
- 老海名理正氏編  
● 耶蘇基督傳 上製六拾五錢 郵稅拾錢 並製五拾五錢 郵稅八錢

- 老海名理正氏著  
● 基督の大訓註釋 上製六拾錢 郵稅拾錢 並製四拾五錢 郵稅八錢
- 露國トルストイ伯著 日本加藤直士譯  
● 我 宗 教 定價七拾五錢 郵稅拾錢
- 文學博士井上哲次郎氏著  
● 釋迦牟尼傳 上製八拾錢 郵稅貳錢 並製六拾錢 郵稅八錢
- 文學博士松本文三郎氏著  
● 佛敎史論 佛敎史論 第一編 佛敎史論 上製八拾錢 郵稅貳錢 並製六拾錢 郵稅八錢
- 文學博士前田慈雲氏著  
● 大乘佛敎史論 上製九拾錢 郵稅拾五錢 並製七拾錢 郵稅拾錢
- 舟橋水哉氏著  
● 小乘佛敎史論 定價五拾五錢 郵稅八錢
- 清水清明氏編  
● 哲學館 倫理問題 定價貳拾五錢 郵稅四錢
- 哲學館 事件と倫理問題 定價貳拾五錢 郵稅四錢
- 中島徳藏氏肖像 清水清明氏編  
● 哲學館 倫理問題續篇 定價參五錢 郵稅六錢

發行所 東京市本郷 四丁目五番地 文明堂

短篇順刊目錄

- 労働者の宗教 小野藤太著述 二月既刊 價五錢
- 軍人と宗教 同 三月五日刊行
- 教育家の宗教 同 四月五日刊行
- 學生の宗教 同 五月五日刊行
- 貴族の宗教 同 六月五日刊行
- 婦女の宗教 同 七月五日刊行
- 冒險家の宗教 同 八月五日刊行
- 法政家の宗教 同 九月五日刊行
- 醫者の宗教 同 十月五日刊行
- 囚徒の宗教 同 十一月五日刊行
- 詩人の宗教 同 十二月五日刊行

明治卅七年二月二十日印刷  
明治卅七年二月廿五日發行

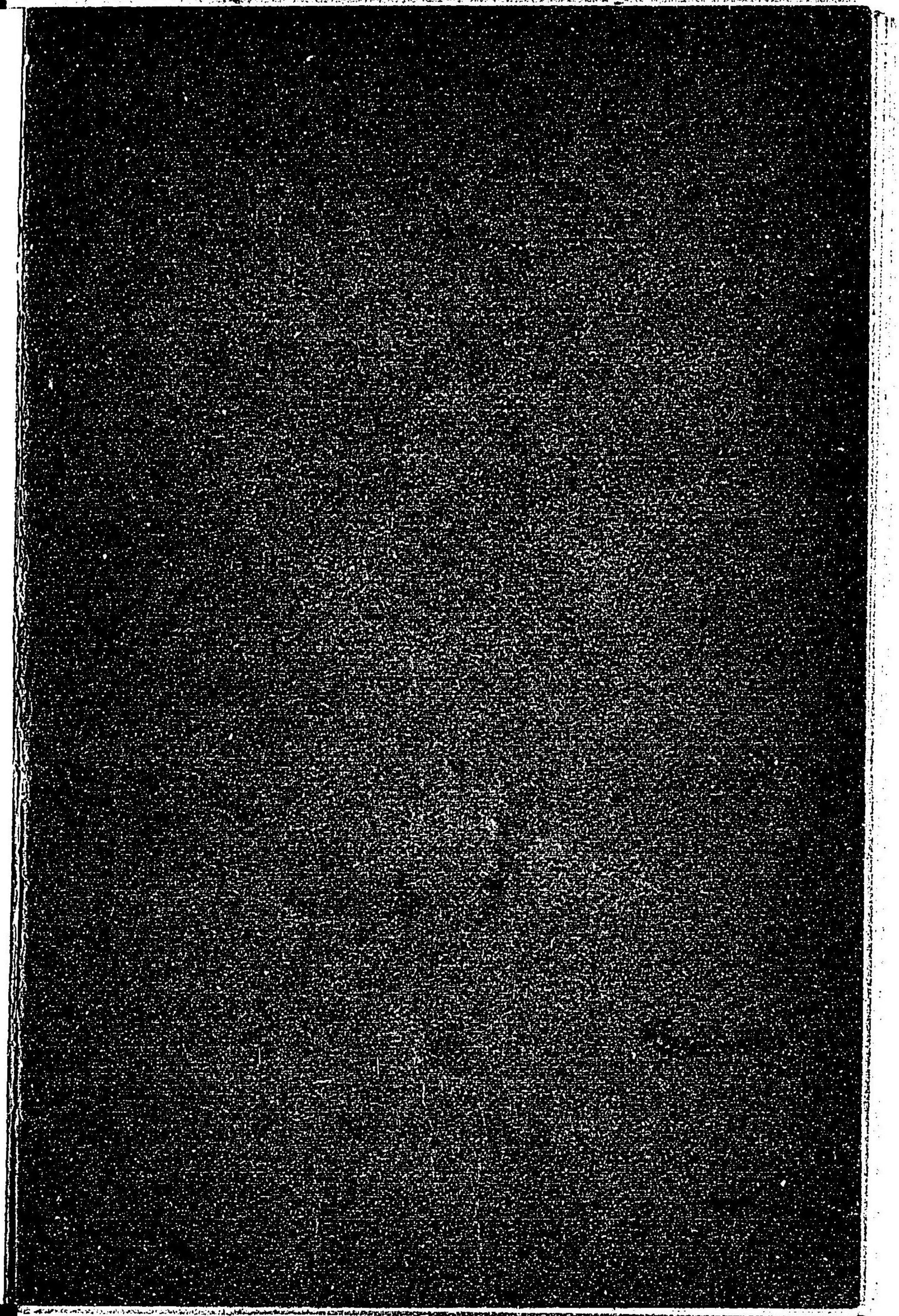
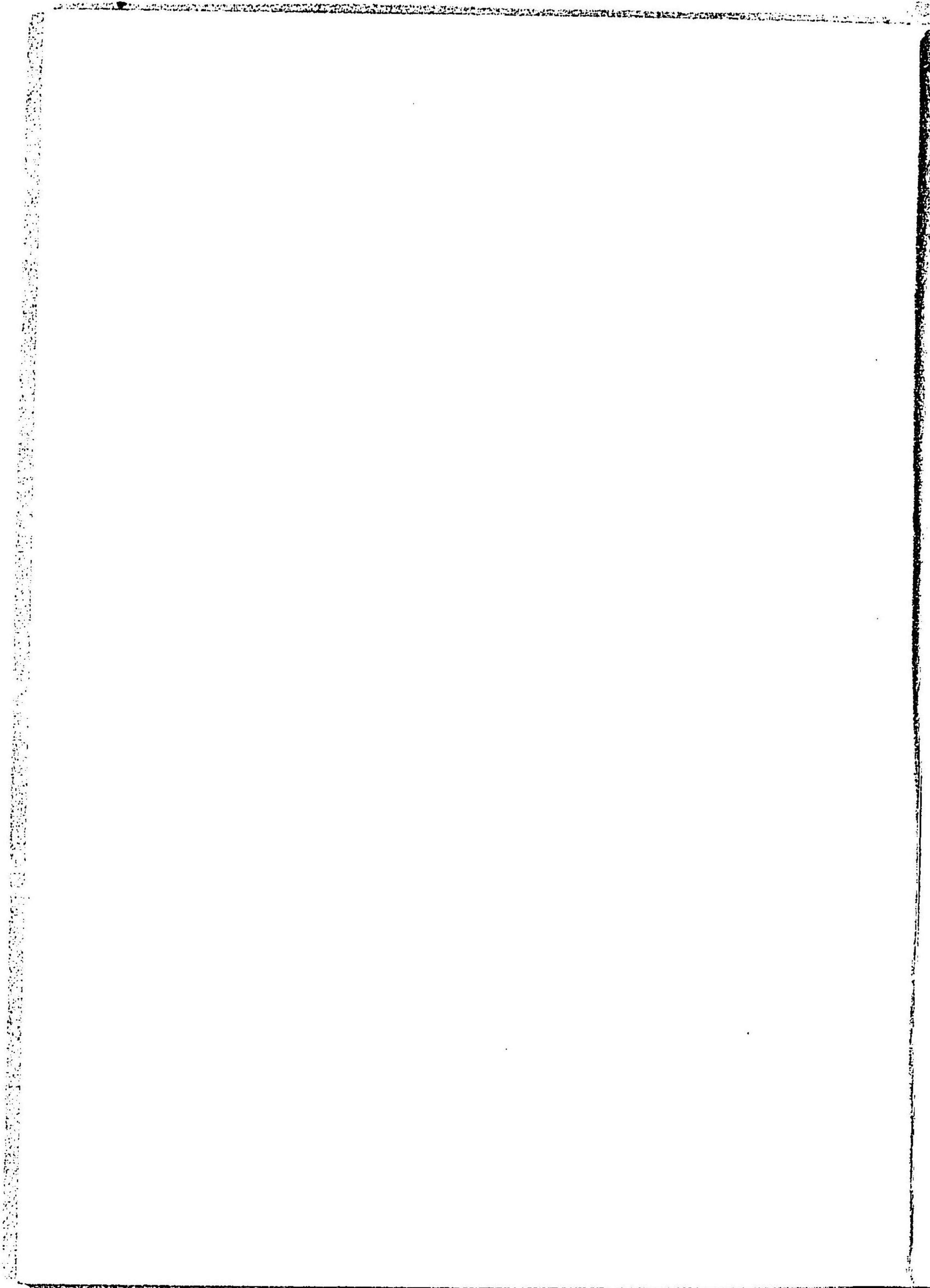
價六錢

著述者 植田 央  
發行者 東京市本郷區助坂町拾番地 小野藤太  
印刷者 東京市京橋區日吉町拾番地 中村彌助  
印刷所 東京市京橋區日吉町拾番地 近藤商店

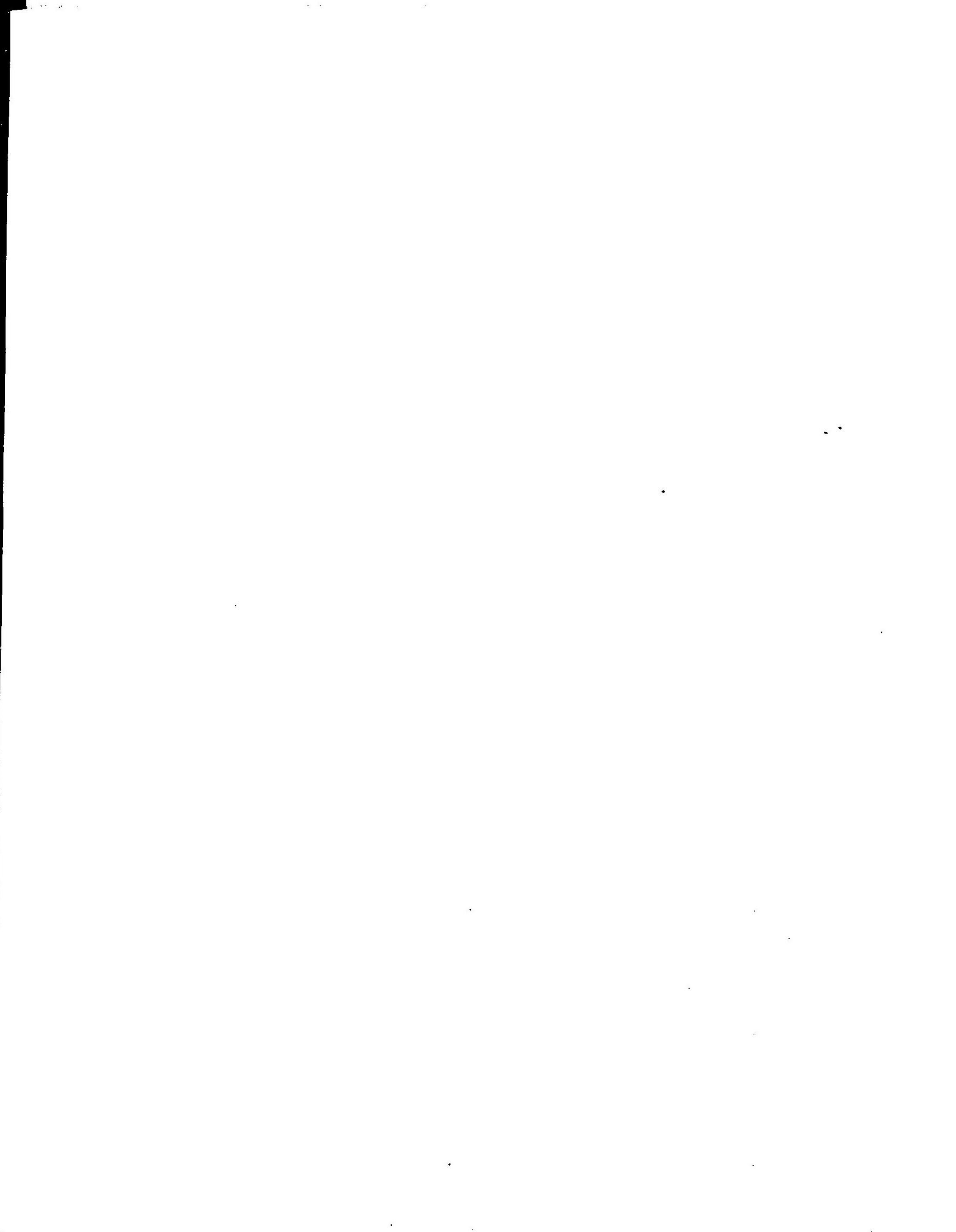
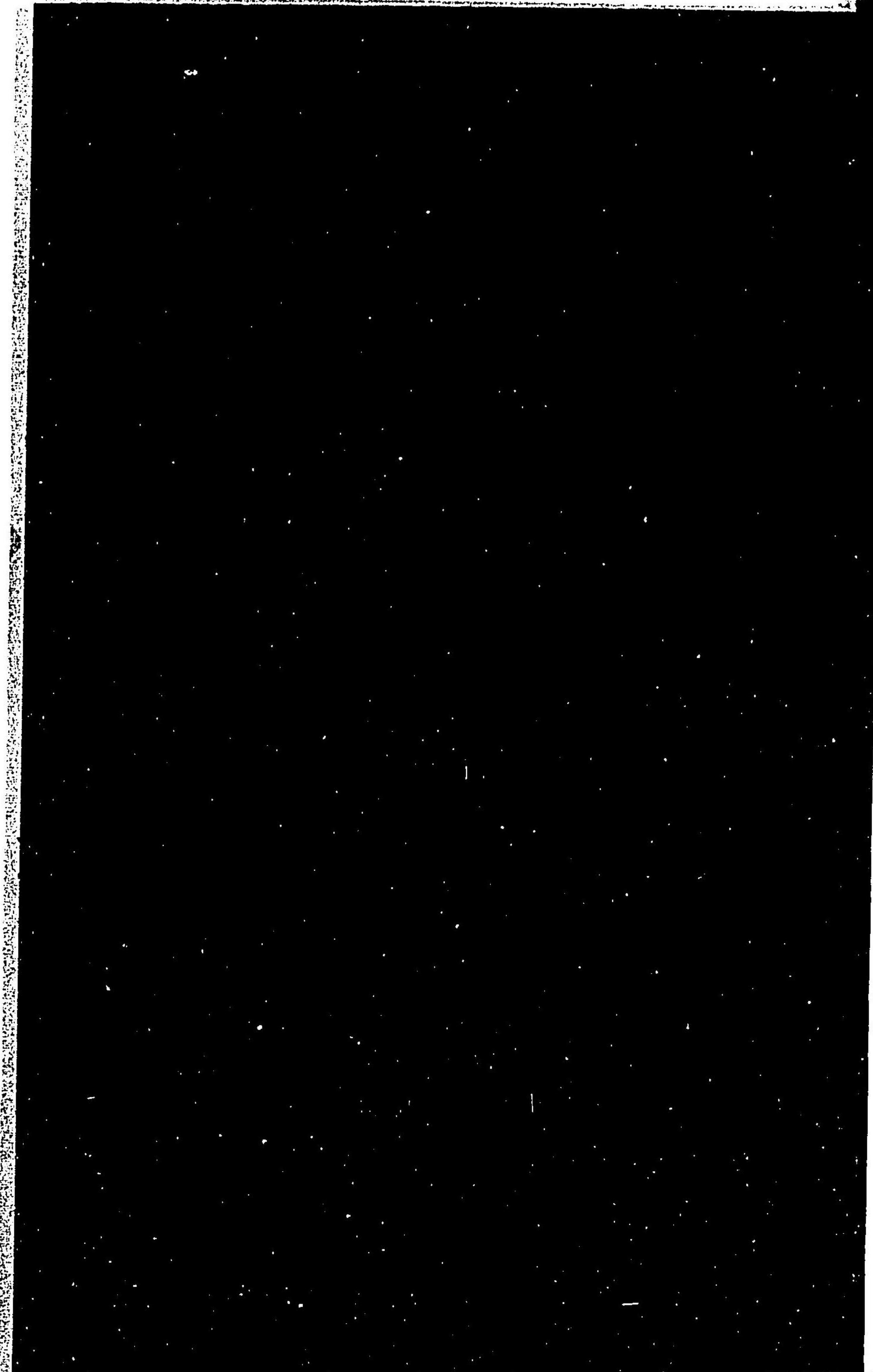
發行所 東京市本郷區助坂町拾番地 宗教研究會  
發兌元 東京市本郷區四丁目五番地 文明堂  
(電話下谷二〇二九番)

大賣捌所 鷄聲堂 光融書院  
鴻盟社 興教書院

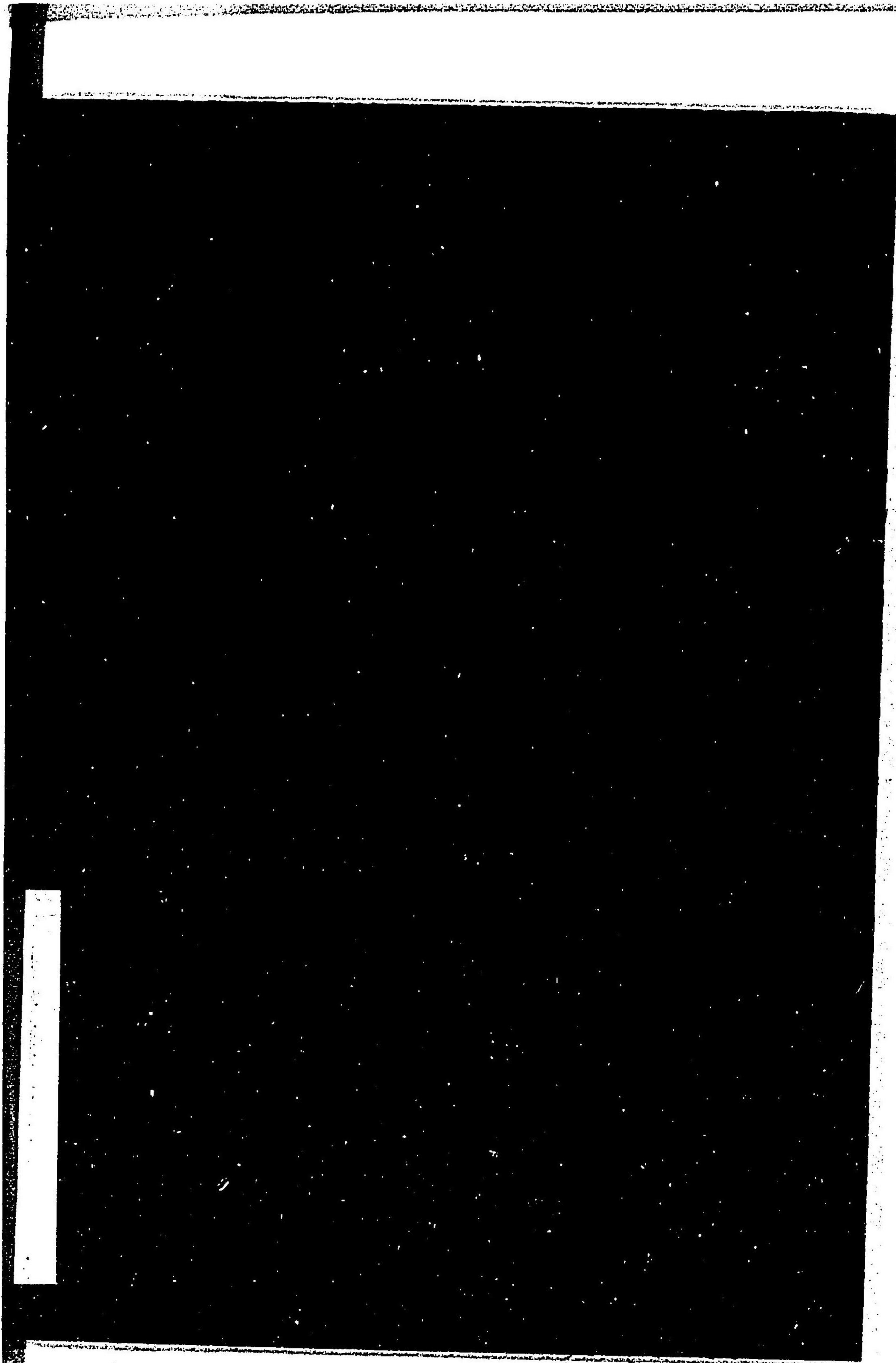












Vertical text or markings on the left edge of the dark area, possibly a page number or a label, but the text is illegible due to the low contrast and high noise.



特46

852

靈界の曙光  
真教の活現 活動教  
真

国立国会図書館

013562-000-3

特46-852

活動教(靈界の曙光 真教の活現)

植田 央/著

M37

ABA-0027





